第 68 回神奈川建築コンクール　住宅部門審査総評

審査委員：鈴木　信弘

住宅部門には 29 件の応募があり、その内訳は個人住宅 22 件、増築 2 件、集合住宅 5 件であった。昨年度を上回る応募を喜ぶ一方で、今年度は方向性の異なる作品が揃い、審査は例年以上に難しいものとなった。「総合的に優れた計画・設計・施工」という審査基準に対し、何をもって「優れている」とするのか、その判断が審査員に問われたからである。一次審査の得票をもとに 11 作品を現地審査とし、3 日間にわたり実際の空間を確認した。二次審査では、美しく完成度が高いというだけでは敷地内に閉じた試みにとどまり、社会への広がりを持ちにくいのではないか、という議論が交わされた。住宅は私的な建築であると同時に、暮らし・環境・技術・地域との関係を映す社会的な器でもある。そこで今年度は、現代住宅が抱える課題に新たな視点や方法を提示していることを重視し、最優秀賞 2 作品、優秀賞 6 作品、アピール賞 1 作品を選出した。なお、現地審査 11 作品のうち 5 作品が設計者の自邸であったことも付記しておく。

最優秀賞**「素襲の家（そかさねのいえ）」**は、石場立ての基礎、手刻みによる大工技術、竹小舞と土壁による住民参加型施工を通して環境負荷を抑えるだけでなく、市民が家づくりに関わる現代の「結」ともいうべき仕組みに挑戦している。施主でもある設計者が施工者と共に、つくり方そのものを社会へ開いた点を高く評価した。

もう一つの最優秀賞**「ニカイメノイエ」**は、設計者・施工者である家族が古家屋を購入し、自ら解体して得た構造材、板材、土などを約 30%程度再利用した新築である。建築材料を次世代へ受け渡すアップサイクルの仕組みへ展開する姿勢に、今後の住宅生産への可能性と示唆を見た。

つづいて優秀賞の**「円筒分水とともに暮らす家」**は、豊かな周辺環境を丁寧に読み込み、各階に多様な居場所を生み出し、それぞれの窓の向きや視線までも計算された丁寧な設計の住宅である。一方で、環境の豊かさゆえに建築そのものの主張やテーマがやや控えめに感じられたことが惜しまれた。

「Flying Sengokuhara」は、三角形平面を覆う大屋根が天井高の変化を生み、上質な居場所をつくっている。熱容量を考えた断熱、輻射冷房、太陽光発電と蓄電によるオフグリッド化、電力使用量を可視化する試みを高く評価した。

「大磯の家」は、屋根に切り取られた空を望む大空間に静謐な時間が流れる端正な住宅である。平屋の佇まいも魅力的だが、外部に対する閉じ方には議論が残った。周囲と緩やかに関係を結ぶ余地があれば、さらに豊かな住宅となるだろうと思う。

「MEIGETSU-K」は、条件の厳しい崖地を設計力によって魅力ある住環境へ転換した。暮らしやすさについて意見は分かれたものの、一般解では得られない空間体験を実現した発想力と実行力を評価した。

「白浜町の家」は、暮らしの中のモノや家事行為を LDK 周囲のサーバントスペースに受け持たせ、中心の生活空間を明快に成立させている。生活行為とモノの動きを平面構成へ翻訳した点に独自性があり、高気密・高断熱に加え、気流まで含めた環境計画、施工者の技術力も評価した。

「虫村（ばぐそん）-都市と農村の間にある住まい方のかたち-」は、山間地域への定住を促す仕組みとして、計画と整備を継続する活動に新しさがあった。パーマカルチャーを軸とした提案は建築の枠を超える可能性を示す一方、建築自体には活動の強度に見合うさらなる展開を期待したい。

「Lichtstufen-Haus（リヒトシュトゥーフェン・ハウス）」は、密集地で建物中央へ採光を導き、階層ごとの光の変化を空間の魅力へ転換している。16 坪という狭小敷地を巧みにまとめた住宅として、アピール賞（狭小地の住宅計画）とした。

今年度の審査を通して、住宅を完成した姿だけでなく、その背後にある設計者の意思や、つくられ方まで含めて評価する時代に入っているのではないかと感じた。一方、集合住宅には、ある種の定型化のなかにとどまり、次の住宅像への思考が止まっているように感じられる作品もあった。来年度も、それぞれの住宅がどのような価値を提示してくれるのかに注目したい。